AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

卒業研究抄録集(看護学科)(2021.12)令和3年度:

高齢者施設における
インフルエンザ感染予防対策に関する文献検討

佐藤麻衣　中山瑠菜　安田りな

（指導：及川　賢輔）

緒　言

わが国では、2025年には団塊の世代が後期高齢者になり、4人に1人が75歳以上という超高齢社会が到来する[1)]。そのような中で、病気のため継続治療を受けながら、終世を施設や在宅で過ごす高齢者が増え、感染症を合併する機会がますます増えている[2)]。特に高齢者施設は、入居者同士が接触する機会が多いため、環境やヒト-ヒト感染を介して、病原微生物が伝搬しやすい[3)]。そのため、高齢者施設においては、常に感染症を念頭に置いてその予防に努める必要があると考える。

近年では、新型コロナウイルスの感染拡大により、高齢者施設においても多くの感染者が出ている。このような現状においての、また、今後新たな感染症の流行が生じた際の予防対策に関する先行研究は少ない。そこで、これまでに多くの集団感染が報告されている感染症から有効な予防策を検討することで、今後の感染症予防に応用できると考えた。

高齢者施設において毎年のようにアウトブレイクの報告がある感染症として、インフルエンザ、ノロウイルス感染症が挙げられる[3)]。国立感染症研究所のデータによると、2018-2019 シーズンのインフルエンザ累積推計受診者数の 60 歳以上の割合は、14.5%である[4)]。

そこで本研究では、高齢者施設におけるインフルエンザ感染予防対策に関する先行研究を分析することで、新型コロナウイルスの流行する現代における有効な感染予防対策への示唆を得ることを目的とした。

用語の定義

・高齢者施設：高齢者が生活する病院と自宅の中間的な施設[5)]。特別養護老人ホーム、介護付き有料老人ホーム、グループホーム、サービス付き高齢者向け住宅などが含まれる。

・インフルエンザ：インフルエンザウイルスを病原とする気道感染症、いわゆる季節性インフルエンザ。2009年にパンデミックを起こしたインフルエンザ ウイルス A(H1N1)pdm09 の感染症である新型インフルエンザは除く。

方　法

【データ収集方法】医学中央雑誌 Web を用い、「高齢者」and「インフルエンザ」and「施設」and「感染予防」で、絞り込み条件は「原著論文」で検索した。この条件で行った検索では、96件の文献がヒットした。その中から、高齢者施設におけるインフルエンザの感染予防対策について記載されている文献 11 件を研究対象とした（対象文献参照）。

【データ分析方法】各文献で述べられているインフルエンザの感染予防対策を抽出し、内容を要約、コード化し、類似性に沿ってカテゴリ化した。なお、文献の整理、内容の抽出には著者の意図する内容を読み込み、記述内容の意味を変えないように、3名の研究者で確認しながら行った。

【倫理的配慮】先行して行われた研究を引用・参照した場合には、引用・参照した文献の出典を可能な限り明示した。

結　果

11 件の対象文献から 41 コード、14 サブカテゴリ（以下、〈〉で示す）、計 5 カテゴリ（以下、【】で示す）を抽出した。カテゴリとサブカテゴリを表1に示す。

表1 インフルエンザ感染予防対策

カテゴリ	サブカテゴリ（コード数）
スタッフの感染管理に関する知識の充実	感染症についての日々の教育(6) 研修や講習会などの実施(4)
看護職の感染管理の知識と経験の活用	施設ごとのマニュアルやシステムの構築(2) 保健師の知識と経験の共有、活用(4)
感染管理に関する地域や多職種間の情報交換と連携	感染予防策の見直し(1) 役割・機能に関する説明(2) 職員の認識の確認(1) 情報交換や連携のためのシステム作り(2)
感染予防策の実践	病原体の除去(1) 感染経路遮断(4) 抵抗力の増強(9) 感染の早期発見(1)
感染予防策を講じるための政策整備	薬剤に関する規定の整備(3) 経済的支援(1)

1．知識や経験の充実と活用

【スタッフの感染管理に関する知識の充実】では、〈感染症について日々の教育〉を施設スタッフに徹底していくこと、〈研修や講習会などの実施〉を通して、医師や感染管理委員会などから、感染症に対する専門的な知識や技術を得る機会を設けることが重要であることがわかった。

【看護職の感染管理の知識と経験の活用】では、感染管理に関する〈保健師の知識や経験の共有、活用〉をしていくことが重要であることがわかった。また、感染予防や蔓延防止対策に施設全体が一体となって対応できるように、〈施設ごとのマニュアルやシステムの構築〉をしていくことも重要であることがわかった。

2．感染管理に関する多職種連携

【感染管理に関する地域や多職種間の情報交換と共有】では、〈感染予防策の見直し〉を施設だけでなく、保健師と行うことで、より改善点を見出すことができ、施設職員や保健師が互いに〈役割

機能に関する説明〉を繰り返し行うことで、個人が自分の役割を理解することに繋がることがわかった。また、実際に感染予防策を実施する職員の認識に間違いがないか、〈職員の認識の確認〉を行いながら支援することで、より確実な感染予防策の実施に繋がる。以上のような感染予防策を地域で協力して行うためには、これらの〈情報交換や連携のためのシステム作り〉が必要になることがわかった。

3. 感染予防策の実施

【感染予防策の実践】の〈病原体の除去〉では、手洗い・手指消毒といった手指衛生が重要視されていることがわかった。〈感染経路遮断〉では、発病者の隔離や面会制限、面会者や職員のマスクの着用といった策が講じられていることがわかった。〈抵抗力の増強〉では、ワクチン接種が感染症拡大防止に有効であることが示唆された。〈感染の早期発見〉では、発熱者に対しインフルエンザウイルス抗原迅速検査の実施がなされていることがわかった。

【感染予防策を講じるための政策整備】の〈薬剤に関する規定の整備〉では、ワクチン接種が自己負担であることや入所者への抗ウイルス薬投与までに時間がかかることなどを問題視する声があり、それらに関する規定の見直しや整備を重要視していることがわかった。

考　察

1．知識や経験の充実と活用

【スタッフの感染管理に関する知識の充実】では、スタッフ全員が教育を受け、各々が適切な知識を身につけることで、日常的な感染予防行動の徹底や、アウトブレイク時の速やかで適切な対応を行うことができると考えられる。

【看護職の感染管理の知識と経験の活用】では、アウトブレイク発生時、保健師は発生状況やその動向、原因等を施設とともに調査し、施設が蔓延防止に向けた対策をとれるように助言や指導が行われていた。しかし、実際にアウトブレイクに対する支援をした経験のない保健師も多いことが考えられる。そこで、個人の経験を共有し、過去の発生例の知識を基に検討することで、多くの保健師が適切な支援を行えるように備えていくことが重要であると考える。また、個々の経験や知識を活用することで、より効果的で実践的なマニュアルやシステムが構築可能であり、時代や施設の特性に合わせて対応できると考える。

2. 感染管理に関する多職種連携

【感染管理に関する地域や多職種間の情報交換と共有】について、感染予防策を地域で協力して行うためには、これらの〈情報交換や連携のためのシステム作り〉が必要になる。勝野ら[6]は、感染予防に関する、情報共有・相談ができる体制の整備などを支援するネットワークを構築する必要性について述べている。従って、システムを地域のなかで組織化することで、情報交換や多職種間での連携が実現できると考える。

3. 感染予防策の実施

感染症の成立には、感染源、感染経路、感受性宿主の 3 つの要素が必要である。よって、これら 3 つの要素を遮断することにより感染拡大を防止することができる。

高齢者施設の職員は、施設の外部との接触の機会が多く、施設に病原体を持ち込む可能性が高いことから、日常からの健康管理が重要となる。また、職員だけでなく、ショートステイ利用者、面会者、ボランティアや委託業者が感染源となり感染症が持ち込まれることが多い[5]。よって、施設に出入りする人々が、皆徹底してこれらの対策を行うことが重要であると考える。しかし、近年流行している新型コロナウイルスのような新興感染症が拡大する初期の段階で、このような対応をとることは不可能である。その際は標準予防策に沿った感染予防策がより重要になるといえるだろう。また、新たな感染症が拡大の兆しをみせたときに施設入所者の家族と早期に連絡を取り、ワクチンが開発された際の対応や面会時の標準予防策の実施に関して説明をすることが、素早い対応に繋がると考える。

また、早期発見といった点では、症候群サーベイランスが有効であると吉田[5]は述べている。症候群サーベイランスでは、探知した感染症が何であるかまでは断定できないが、迅速に管理・予防を図ることが可能となるため、新たな感染症の流行にも早期に対応するために重要であると考える。

対象文献

1）鷲尾昌一，高山直子(2018)：インフルエンザ感染の予防対策からみる高齢者入所施設における多職種連携の課題　看護責任者の役割と地域医師会に期待するもの，臨牀と研究，95(4)：413-417.

2）織田雅也,大石歩美，西本ゆう子他(2017)：療養型病床で非流行期に発生したインフルエンザ集団感染を制御　し得た経験,日本老年医学会雑誌,54(4):589-591.

3）村井ふみ，安田貴恵子(2016)：A 県における感染症集団発生と保健所保健師による支援経験の現状　高齢者福祉施設への支援の現状と困難さに着目して,長野県看護大学紀要,18:1-13.

4）嶋田裕(2016)：特別養護老人ホームにおけるインフルエンザ集団感染,京都医学会雑誌,63(1):91-94.

5）下田貴博，津久井智，高橋篤(2016)：社会福祉施設の季節性インフルエンザアウトブレイクの特徴とその長期化及び拡大に及ぼす因子の疫学研究,感染症学雑誌,90(2):99-104.

6）大浦絢子，松下幸平，青地ゆり他(2014)：全国特別養護老人ホームにおける感染管理に関する調査報告，体力・栄養・免疫学雑誌,24(3):213-215.

7）脇坂浩，清水宣明(2014)：A 県の高齢者介護施設における感染症対策のアンケート調査,本環境感染学会誌,29(5):354-360.

8）鈴木陽子(2012)：高齢者ケア施設における感染管理の課題と看護職に期待される役割,自立支援介護　学,6(1):52-57.

9）大浦麻絵，鷲尾昌一，小笹晃太郎他(2006)：看護・介護職員のインフルエンザ罹患が施設内流行に及ぼす影響，北海道インフルエンザ研究,臨牀と研究,83(1):88-90.

10）鷲尾昌一，大浦麻絵，小笹晃太郎他(2005)：施設入所高齢者と看護・介護職員のインフルエンザワクチンの接種状況と施設内流行　北海道インフルエンザ研究,臨牀と研究，82(12):1996-2000.

11）木村三生夫，鈴木功，三上稔之他(2002)：介護老人保健施設におけるインフルエンザ対策に関する研究(2000～2001 シーズン),臨床とウイルス,30(4)，255-265.

引用 ・ 参考文献

1）内閣府（2018）「高齢化社会の現状と将来像　平成 30 年版高齢社会白書　（全体版）」(https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_1_1.html)(2020 年 9 月 30 日閲覧)

2）大曲貴夫，操華子編（2015）：感染管理・感染症看護テキスト，375，照林社

3）光山正雄（2016）：高齢者感染症～超高齢社会の課題と特徴～，28-29，85，医薬ジャーナル社

4）国立感染症研究所　厚生労働省結核感染症課（2019）「今冬のインフルエンザについて（2018/19 シーズン）」(https://www.niid.go.jp/niid/images/idsc/disease/influ/fludoco1819.pdf)（2020 年 9 月 23 日閲覧）

5）吉田正樹編（2018）：高齢者施設でできる感染制御マニュアル，8，9，日本医事新報社

6）勝野絵梨奈，栗原保子，邊木園幸他(2015)：地域の感染管理ネットワーク構築に向けた取組　感染管理スキルアップ研修における出前方式体験型研修に参加した受講生のニーズ調査より，宮崎県立看護大学看護研究・研究センター事業年報，4，54-61.